

# 『老乞大』諸資料における中国語“有”字文の諸相

## — “一壁有者”再考

关于《老乞大》4种版本里的“有”字句 ——再考“一壁有者”

玄 幸 子  
GEN YUKIKO

本稿以《老乞大》為語言資料，對“有”字句進行整理分析。《老乞大》最早的版本是朝鮮高麗時代編輯的，反映中國元代語言的情況。然後在李氏朝鮮，按照使用時期的語言情況，改變了幾次。在比，對照代表各各時代的四種版本，總結《老乞大》“有”字句的特點，結果見證了這個資料裡面百分之九十卻跟現代漢語規範用法一樣。關於百分之一的例句，從來有些論文主張這種用法很特色的，特別語序上受到蒙古語或者朝鮮語的影響。可是詳細調查全部句子之後，又得了別的看法：這就是受到了漢語口語的影響，省略介詞而已，不一定是受到外語的干涉。

### 關鍵詞彙

“有”字句 老乞大 口語 介詞 語序

中国語における存在文の特異性はつとに指摘され、教学においても重要視される文法項目の一つである。中でも主動詞に“有”を持つ文は“有”字文と呼ばれ、とりわけその語序において注目される。が、これは現代中国語規範文法における事象であり、実は歴史的に見て語序におけるバリエーションは意外に豊かであること、このバリエーションのうち多くが目的語強調形式、つまり主題化による目的語前置に起因し、口語的<sup>1)</sup>な表現であるということを玄2007で主張した。本稿では、この見解の妥当性を確認し、『老乞大』諸資料に見られる用例から朝鮮資料の中国語史研究における意味と意義について再検討を行う。

今回対象とする資料は、高麗時代に恐らくその原本が編まれ、李朝期に継続して使用された中国語のテキスト『老乞大』の現在目睹しうる最古の版本とその後の改定本3種である<sup>2)</sup>。使用した資料は以下の通りである<sup>3)</sup>。便宜上本稿では略称を使用する。

舊本『老乞大』～15世紀	略称「原」
舊刊『老乞大』1670年(奎2044)	略称「舊」
『老乞大新釋』1761年(奎4871)	略称「新」
『重刊老乞大』1795年(奎4869)	略称「重」

## 1. 現代中国語との比較

最初に『老乞大』に見られる“有”字文について現代中国語の分類を基準に分類を試み、各分類ごとに現代語との差異があるかどうかを考察する。そのためには、まず、現代語における“有”字文の分類法を規定する必要がある。ここでは、木村 2010<sup>4)</sup>に基づいて次の A-H の 8 分類をおこなう<sup>5)</sup>。

タイプ A：特定の時空間におけるリアルな具体物の存在

タイプ B：特定の時空間におけるリアルな状況の存在

タイプ C：構造体における構成部品の存在

タイプ D：範疇における成員の存在

タイプ E：事物における相対的關係者の存在

タイプ F：所有物としての存在

タイプ G：事物における質的属性の存在

タイプ H：事物における量的属性の存在

### 【タイプ A】

このタイプの用例は次にあげる例のように、場所詞ないし時間詞を主語にもち、目的語に不定のマークである数量詞を伴うケースが多くみられる。さらに元代の言語を反映しているとされる舊本『老乞大』（略称「原」）からほぼ 19 世紀に成った重刊本まで一貫して書き換えは認められないものがほとんどである。

(第 7 話)<sup>6)</sup>

原：近有相識人來說：馬的價錢這其間也好。

舊：近有相識人來說：馬的價錢這幾日好。

新：近有相識的人來說：馬的價錢這幾日好。

重：近有相識人來說：馬的價錢這幾日好。

(第 8 話)

原：咱每往前行的十里來田地裏，有箇店子，名喚瓦店。

舊：咱們往前行的十里來田地裏，有箇店子，名喚瓦店。

新：咱們往前走十多里路，有一箇店，名叫做瓦店。

重：咱們往前走十多里路，有箇店，名叫瓦店。

(第 21 話)

原：年時又有一箇客人趕著一頭驢，著兩箇荊籠子裏盛著棗兒，駝著行。

舊：年時又有一箇客人趕著一頭驢，着兩箇荊籠子裏盛着棗兒，駝着行。

新：舊年又有一箇客人赶着一頭驢子，兩箇荆籠子裏盛着棗兒，駝着走。

重：舊年又有一箇客人赶着一頭驢子，兩箇荆籠子裏盛着棗兒，駝着走。

上記3例とも、4種版本間での書き換えが見られず、さらに第8話、第21話の用例では目的語に、不定のマーク（数量詞）を伴う。

さらに軽くなり、不定のマーク（数量詞）を伴わず、まるで任意を意味する接頭辞の様な“有”の用法もある。“有人”“有时候”“有地方”など現代語におけると同様の例は、以下の通りである。

（第4話）

原：有人問着一句話也說不得時，教別人將咱每做甚麼人看？

舊：有人問着一句話也說不得時，別人將咱們做甚麼人看？

新：倘有人問一句話也說不出來，別人將我們看作何如人也？

重：倘有人問一句話也說不出來，別人將我們看作何如人？

このようなタイプAの用例は後述の如き書き換え例8例を含めて全44カ所に見られる。

### 【タイプB】

この例は全18カ所に確認された。4種版本間での書き換え状況もほぼ見られない。

（第18話）

原：今日是二十二，五更頭正有月明也，鷄兒叫，起來便行。

舊：今日是二十二，五更頭正有月明，鷄兒叫，起來便行。

新：今日是二十二日，五更時正有月，鷄叫，起來走罷。

重：今日是二十二日，五更時正有月亮，鷄叫，起來走罷。

### 【タイプC】

このタイプも多くはない。全11カ所に見られるだけである。タイプBと同様、4種版本間での書き換え状況もほとんどない。第50話の用例は、玄2007で検討した強調形である。

（第92話）

原：冬裏繫犀繫腰，有綜眼的，更毛犀不要。

舊：冬裏繫金廂寶石闊裝，又繫有綜眼的烏犀繫腰。

新：冬裏要繫金廂寶石的，或是有綜眼的烏犀帶纜繫。

重：冬裏繫金廂寶石的，或是有綜眼的烏犀帶纜繫了。

（第94話）

原：一對靴上都有紅絨鴈爪，那鞋底都是兩層淨底，……

「舊」、「新」、「重」すべて同文。

（第50話）

原：字兒伯兒分明都有，怎麼使不得？

舊：細絲兒分明都有，怎麼使不得？

新：細絲都有在內，怎麼使不得？

重：細絲分明都有，怎麼使不得？

### 【タイプD】

このタイプは全24カ所でみられる。次の3例は、ほぼ現代語と同じ語序、用法である。第105話の例で、「新」「重」に量詞“箇”が加えられているのは、より現代語の特徴に近づいていると言えよう。

(第40話)

原：後頭房子窄，老小更多，又有箇老娘娘不快。

舊：後頭房子窄，老少又多，又有箇老娘娘不快。

新：後頭房子窄，家裏孩兒們也多，又有箇老娘身子不快。

重：後頭房子窄，家裏孩兒們也多，又有箇老娘身子不快。

(第54話)

原：師傅店裏有俺相識，那裏問去。

舊：吉慶店裏有我相識，那裏問去。

新：那吉慶店裏有我的相識，我到他那裏去問一問看。

重：那吉慶店裏有我的相識，我到那裏問去。

(第105話)

原：這裏有五虎先生，最算的好有。咱每那裏算去來。

舊：這裏有五虎先生，最算的好。咱們那裏算去來。

新：這裏有箇五虎先生，最是算的好。咱們就到那裏算卦。

重：這裏有箇五虎先生，看命最好。咱們到那裏問問。

次例の様な強調形目的語前置も認められた。

(第52話)

原：那般者，俺自做喫，鍋竈椀櫟都有麼？

舊：我們自做喫時，鍋竈椀櫟都有麼？

新：我們若自己做飯吃，鍋竈椀櫟都有麼？

重：我們若自做飯喫，鍋竈椀櫟都有麼？

### 【タイプE】

このタイプは用例が最も少なく、全4例のみである。

(第1話)

原：俺有一箇伴當落後了來，俺沿路上慢慢的行著〔等〕候來。

舊：我有一箇火伴落後了來，我沿路上慢慢的行着等候來。

新：我因有箇朋友落後了，所以在路上慢慢的走着等候他來。

重：我有一箇朋友落後了，所以在路上慢慢的走着等候他來。

次のような例は、主語に2項目あり判断に迷うところである。Aタイプに入れるべきであろうか。ここでは、現代語との差異を明らかにする事を主たる目的としているので、仮の分類としてタイプEに分類しておく。

（第32話）

原：恁外頭更有伴當麼？

舊：你外頭還有火伴麼？

新：你們外頭還有火伴麼？

重：你們外頭還有火伴麼？

#### 【タイプF】

全34例である。後文で挙げるような一部書き換え例が見られる。

（第58話）

原：到東京這壁廂，厮合著，他也有幾箇馬，一處趕將來。

舊：到遼東這邊，合將他來，他也有幾疋馬，一處趕將來。

新：他在遼東這邊，我同他作伴來，他也有幾匹馬，一同趕來要賣。

重：他在遼東這邊，我同他作伴來，他也有幾匹馬，一同趕來要賣。

また、次の第72話のように舊本『老乞大』（略称「原」）にはない文が増加した3箇所を含む。

（第72話）

原：

舊：你有好綾子麼？

新：你有好綾子麼？

重：你有好綾子麼？

強調形も次の通りみられる。

（第13話）

原：草料都有，料是黑豆，草是稗草。

舊：草料都有，料是黑豆，草是秆草。

新：草料都有，料是黑豆草是秆草。

重：草料都有，料是黑豆草是秆草。

### 【タイプG】

現代語と同じ用法には、次のような例が挙げられる。

(第69話)

原：俺不會好生觀，這箇馬元來有病。

舊：我不會好生看，這箇馬元來有病。

新：我沒有好生細看，這馬原來有病。

重：我不會好生細看，這馬原來有病。

「原」「舊」と構文が異なり「新」「重」で“有”字文となるものに次例がある

(第87話)

原：伴當其間，自家能處休説、休自誇，別人落處休笑。

舊：火伴中間，自家能處休説、休自誇，別人落處休笑。

新：火伴們，你們自家有能處，不要自己誇張，別人有壞處，不要笑話他。

重：火伴們，自家有能處，不要誇張，別人有壞處，不要笑話他。

この例は、「新」「重」で“有”が加えられたケースである。が、「自分の秀でたところは自慢するな」「自分に秀でたところがあっても自慢するな」というように、単文形式から複文形式へ構文自体が変更しているものであり、今回の検討項目に当たらないと判断する。厳密には資料ごとの用例数に差が出るが、出現箇所数として計上する。

(第89話)

原：那病人想著沒友情分，悽惶呵，縱有五分病，添做十分也者。

舊：那病人想着沒朋友的情分，悽惶時，縱有五分病，添做十分了。

新：那病人想着沒有朋友的情分，心裏悽惶麼，纔得五分病也，就添做十分了。

重：那病人想着沒有朋友的情分，心裏悽惶麼，纔得五分病，也添做十分了。

この例では、上の例とは逆に「新」「重」で別の動詞“得”に書き換えられ、“有”の用例が減少している。が、本稿の検討項目の対象とはならない書き換えであると判断し、「現代語と同じで（語序）書き換えなし」の範疇に分類する。

このタイプの用例は後文にあげる検討対象となる語序書き換えの例と併せて、全16カ所に見られる。

### 【タイプH】

全22カ所に見られ、4種版本間で語序の書き換えは見られない。現代語と同じ用法である。距離、深さ、年齢、時量などに使用されている。

(第36話)

原：這裏到夏店，演裏有十里來地。

舊：這裏到夏店，還有十里來地。

新：這裏到夏店，還有十里來地。

重：這裏到夏店，還有十里來地。

以上、ことさらに現代語と同じ用例をタイプごとに例を挙げた。これらの例をみれば、従来とりわけ語序、また動詞“在”との関連に於いて資料の特殊性を指摘される事が多いにもかかわらず、“有”字文については実際はごく標準的な中国語を使用していることが見て取れる。

用例数からみる結論は次の通りである。本資料には全部で174カ所の“有”字文出現個所が計上される。そのうち、現代語と同じ使用法（強調形も含む）は、次で検討する書き換え16例と特殊な動詞の用例2例<sup>7)</sup>の全18例を除く156例である。これは、資料中の“有”字文のおよそ90%が元代の言語を反映している舊本『老乞大』（略称「原」）からすでに現代語と同じ用法であったということを示している。

では、残りの10%の用例について次に検討してみよう。

## 2. 特殊だとみなされる数種の文例について

さて、ここでは一つは語序について、次に動詞“在”との関連からという2つの面から特殊であるとされる例について考察する。

### 2-1 語序

次のような例がしばしば舊本『老乞大』（略称「原」）に反映される言語の特殊性を説明するときに挙げられる。この種の例から引き出されるのは、元代にモンゴル語の影響下に使用された特殊な言語<sup>8)</sup>が、後に淘汰され本来の漢語の語序に改正されたとする考え方である<sup>9)</sup>。

（第19話）

原：爲甚麼這般的歹人有？

舊：爲甚麼有這般的歹人？

新：爲甚麼有歹人呢？

重：爲甚麼有歹人？

確かに、改定に従い語序が改まり、さらに特定を示唆する“這般的”が削除されて現代語の規範語法に近づいているように思われる。労を厭わず以下に同様の例を挙げてみよう。いずれも、「舊」ですでに語順が書き換えられている例である。

（第75話）

原：賣的好弓，有麼？

舊：有賣的好弓麼？

新：有賣的好弓麼？

重：有賣的好弓麼？

(第57話)

原：俺家裏書信有那沒？／書信有。

舊：我家裏有書信麼？／有書信。

新：我家裏有書信來麼？／有書信，帶來了。

重：我家裏有書信來麼？／有書信，帶來了。

次の例は「新」「重」から書き換えが行われている。第77話の例は語序の書き換えといえるかどうかあいまいではあるが、テーマで前に出ていた“弦”を言わず、「新」「重」では単に“有”とのみ返答する形に改められている。

(第76話)

原：你將這一張黃樺弓上絃者。我試拽，氣力有呵，我買。

舊：你將這一張黃樺弓上弦着。我試扯，氣力有時，我買。

新：你把這一張黃樺皮弓上了弦。我拉拉試試看，有幾箇氣力若好，我就買了去。

重：你把這一張黃樺皮弓上了弦。我拉拉看，有幾箇氣力若好，我就買了。

(第77話)

原：有賣的弓絃時將來，俺一就買一條，就這裏上了這弓者。

絃有，你自揀著買。

舊：有賣的弓弦時將來，我一發買一條，就這裏上了這弓着。

弦有，你自揀着買。

新：再有賣的弓弦取來，我也買一條，就這裏上了這弓去。

有，你只揀着買。

重：有賣的弓弦取來，我也買一條，就這裏上了這弓去。

有，你只揀着買。

次も同様に、「新」「重」で書き換えられている例である。単なる語順書き換えではなく“……有來”“……有來”“……有來”と並列であったものが、最初の文は副詞“都”を伴う強調表現に、その後は“又有……”と語序を書き換えている。

(第90話)

原：父母在生時，家法名聽好來，田產物業有來，孳畜頭匹有來，人口奴婢有來。

舊：父母在生時，家法名聲好來，田產家計有來，孳畜頭口有來，人口奴婢有來。

新：他父母在生時，家法名聲好來，田地房產都有，又有騎坐的牲口，使喚的奴婢。

重：他父母在生時，家法名聲好來，田地房產都有，又有騎坐的牲口，使喚的奴婢。

ところで、新積本と重刊本の言語は、刊行年は重刊本が遅れるが重刊本の方がやや保守的な改定を経る傾向があり、新積本がより口語的特徴を有している。よって次の例のように、新積本でより一層現代語の特徴に近づく改定をしている場合がある。

(第55話)

原：拜揖哥哥，這店裏賣毛施布的高麗客人李舍有麼？

舊：拜揖大哥，這店裏賣毛施布的高麗客人李舍有麼？

新：大哥作揖了，這店裏却有賣毛藍布的朝鮮客人李舍麼？

重：大哥作揖了，這店裏賣毛藍布的朝鮮客人李舍有麼？

「原」「舊」「重」は同じ語序であるのに対して、「新」で現代の規範と一致する語序に書き換えられており、「この宿」の宿泊客の中に「毛藍布を売る朝鮮の客の李さんというのがあるか？」という成員の存在をいうタイプDの“有”字文となっている。さらに「新」で現代語の規範に合う語序に書き換えられている例を挙げる。

(第52話)

原：車子，有麼？

舊：車子，有麼？

新：有車子沒有？

重：車子，有沒有？

(第55話)

原：他出去了，看家的有那沒？

舊：他出去了，看家的有麼？

新：他出去了，看家的有誰呢？

重：他出去了，看家的有麼？

第55話の例は、語序の書き換えではなく、「留守番をする者に誰がいるか？」という構文に書き換えることで、“看家的”が目的語ではなく構成員の範疇を提示する主語となっている。

以上の語序書き換え状況から明らかに言えることは前章で挙げたいくつかの例のように、“都”などの副詞を伴った強調形である目的語前置の構文は4種版本間での書き換えが皆無であるのに対して、ノーマーク<sup>10)</sup>の場合は何らかの形で書き換えが行われているということである。よって、もし、書き換えの意味を厳密に分析するのであれば、ノーマークの目的語前置文が、徐々に順を追って、現代語の規範的用法、つまり目的語を動詞“有”の後につなげる形へと書き改められたと結論付ける事ができよう。

## 2-2 従来“在”との混同とされる用例

次に、従来動詞“在”と“有”の混同であると解釈されている用例について検討してみよう。

(第68話)

原：更不時，恁都則這裏有者。

舊：更不時，你都只這裏等候着。

新：不要那麼的呢，你們都在這裏等候着。

重：不要那麼的呢，你們都在這裏等候。

(第69話)

原：你都這裏有者，我稅契去。

舊：你都這裏等候着，我稅契去。

新：你們在這裏等候着，我稅了契就來的。

重：你們在這裏等候着，我稅了契就來。

(第54話)

舊：你既賣時，也不索你將投市上去，則這店裏有者。

鬮：你既賣時，也不須你將往市上去，只這店裏放着。

新：你既要賣，也不必你往市上去，就這店裏放着。

重：你既要賣，也不必你往市上去，只在這店裏放着。

上の第68・69話2例の“恁都則這裏有者”“你都這裏有者”は類似表現が元曲に見られる。そこで、『漢語大詞典』など工具書の中では、“有”の字義に“等着”を充てて置き換えてしまうものもある。が、第54話のように“放着”で置き換えられている例からも明確なように“有”自体に「待つ」「置く」という意味づけをするのには当然無理がある。

さらに金1988のように、元曲中のこのような“你則這裏有者”の例に対して“你在這裏吧”の意味であり、現代中国語で“在……”というのに対して“……有”という言いかたをするのは、「蒙文直訳体」的表現が、話し言葉にまで影響を与えていたことの証左であると説明する論考もある<sup>11)</sup>。本稿は、このような主張に対して別の可能性を示すことを目的とする。

そこで興味深いのは次の2例である。第53話では最も新しい言語を反映している「新」、第23話では最も古い言語を反映している「原」に奇しくも同形の“在+(場所詞)+有”が現れている。第53話では、“店在那裏？”に対する答えであるので、当然主語“店”を補って考えられるのであるが、では、この“店”をどこに補うかという事が重要なポイントとなる。先に結論を言えば、本資料における最も適切な位置は(店)で示したように文頭であると考えられる。その根拠については、次章に明らかに示す。

(第53話)

原：店在那裏？／(店)兀那西頭有。

舊：店在那裏？／(店)那西頭有。

新：店在那裏？／(店) 在那西頭有。

重：店在那裏？／(店) 在那西頭。

(第23話)

原：井在那裏有？／兀那家後便是井。

舊：那裏有井？／那房後便是井。

新：那裏有井？／那房後便是井。

重：那裏有井？／那房後便是井。

第23話の書き換えは非常に興味深い。現代語でも、「トイレはどこか」と尋ねる場合、“廁所在哪儿？”と“哪儿有廁所？”の2通りの尋ね方がある。数人のインフォーマントに確認したところ、ほぼ同義であり、前者はトイレがあるという事を前提にしその所在を尋ね、後者はあるかどうかわからない時に尋ねるといった違いがあるという。ということは、「原」での“井在那裏有？”はこの資料では介詞の省略形“井那裏有？”と同じであり、主動詞は“有”であって、“在”ではないといえる。つまり、主動詞を残しノーマークの前置目的語“井”を“有”の後ろに続ける書き換えがなされたと判断できよう。

そして第53話の書き換えは、「新」「重」では介詞“在”が大量に使用されるようになった状況を反映しており、「重」においても“有”が残っていて不思議ではないところに、問いが所在文であること、「新」ほどには口語性が強くない資料の性質から、本来主動詞であった“有”が脱落したものと考えられる。

以上から、本資料では従来主張されているような“有”と“在”の混在はむしろ認められないと結論付ける事ができる。また、存在動詞“有”の現代語規範文法における語序の特異性とその拘束力はこの資料に於いてはまだ明らかに見る事ができないという点を併せて確認できよう。

### 3. “一壁有者”再検討

玄2007では“一壁有者”について、「この“有”はすでに多くの指摘があるように元代の言語の特徴を反映していると考えるのが妥当であろう」といった結論付けた<sup>12)</sup>のであったが、その後用例の検討を進めるうちに、この結論を修正すべきであるとの結論を得た。ここでは、改めて“一壁有者”をキーワードに従来主張される“有”の特殊用法について再度検討を加える。まず、“一壁有者”自体は本資料には見られない事を断っておく。その上でこの構造を理解するのに本資料が非常に重要な証左となる事を以下に検証する。

まず、この問題を扱うのに重要なポイントとなる“在”について出現状況を確認しておく必要がある。第53話で見られた“店在那裏？”のように主動詞として用いられる用例は全14カ所に見られる。“有”或いは他の動詞への書き換え状況は見られない。4種版本間で共通する介詞の用例は10カ所に見られた。では、4種版本間で異同がある場合を次に見てみよう。

(第31話)

原：將卓兒來，教客人每則這棚底下坐的喫飯。

舊：將卓兒來，教客人們只這棚底下坐的喫飯。

新：拿桌子來，教客人們就在這棚子底下坐着吃飯。

重：拿桌子來，教客人們就在這棚子底下坐着喫飯。

(第33話)

原：主人家哥，休恠。小人每這裏定害。

舊：主人家哥，休恠。小人們這裏定害。

新：主人家，別恠。我們在這裏打攪了。

重：主人家，別恠。我們在這裏打攪了。

(第40話)

原：你不嫌冷時，則這車房裏宿如何？

舊：你不嫌冷時，只這車房裏宿如何？

新：你若不嫌冷，就在這車房裏住一宿如何？

重：你若不嫌冷，就在這車房裏住一宿如何？

(第42話)

原：儘教，恁客人則這車房裏安排宿處，我著孩兒每做將粥來與恁喫。

舊：罷罷，你客人只這車房裏安排宿處，我着孩兒們做將粥來與你喫。

新：也罷，客人們且在車房裏收拾，我教孩子們做些粥來與你們吃罷。

重：也罷，客人們且在車房裏收拾，我教孩子們做些粥來與你們喫罷。

(第55話)

原：既他羊市角頭去呵，又不遠，俺則這裏等。

舊：既他羊市角頭去時，又不遠，我只這裏等。

新：他既往羊市角頭去，路又不遠，我就在這裏等他罷。

重：他既往羊市角頭去，路又不遠，我只在這裏等他罷。

上記の例のように「新」「重」で介詞“在”が新たに使用されるケースが42カ所あり、「新」のみで増えた7カ所、「重」のみに見られる2カ所を計上すると、全51カ所で介詞“在”の添加が認められるのである。これは玄2007で取り上げた『朴通事』資料とまったく同じ傾向である<sup>13)</sup>。とすれば、仮に本資料「原」に“一壁有者”という表現が認められたとすれば、「新」「重」では“在一邊有着”というように“在+(場所詞)+有”の構造に書き改められたに違いなく、これをもってして動詞“在”と“有”の混同とは認められない。

従来論考では、恐らく目前に既に存在が認められる者に対して「存在せよ」という表現に矛盾を感じるということにおいて、「そこにおれ」という所在文を使用すべきとの理論的判断が働くために、動詞“在”と“有”の混同という主張が出てくるものと考えられる。また、玄2007でも「朴通事」資料2種間での書き換え状況を紹介<sup>14)</sup>し、やはり動詞“有”の特殊用法ということに一旦は帰結せざるを得なくなったのであるが、本資料「老乞大」での状況を検討し別の解釈をすべき可能性が出てきた。

そこで、従来元代の特殊方法・誤用とされる、或いは佐藤1994での“有”の「不思議な用法」が時代を下った資料に於いても見られる事をまず確認してみる。ざっと検索をかけた結果

であるので、それぞれの資料を詳細に調査すればさらに多くの用例がみられることが予想される。また、『紅樓夢』等の用例については、呂叔湘1982でもすでに検討されている。ここでは、以下の3例を挙げるにとどめる。

《水滸傳》卷三十五

宋江便問道：我父親和四郎有麼？ 莊客道：太公每日望得押司眼穿，今得歸來，却是歡喜。方纔和東村裡王社長，在村口張社長店裡吃酒了回來，睡在裡面房內。

《今古奇觀》卷二十四

魯公子正等得不耐煩，只爲沒有衣服，轉身不得姑娘也。焦躁起來，呼莊家。往東村尋找兒。並無蹤跡。走向媳婦田氏房裏，問道：兒子衣服有麼？ 田氏道：他自己檢在箱裏，不曾留得鑰匙。

《西遊記》第三十七回

你本是烏雞國王的太子，你那裏五年前，年程荒旱，萬民遭苦，你家皇帝共臣子，秉心祈禱。正無點雨之時，鍾南山來了一個道士，他善呼風喚雨，點石爲金。君王忒也愛小，就與他拜爲兄弟。這樁事有麼？」太子道：「有有有！你再說說。」

《今古奇觀》と《西遊記》の例は先に検討した主題化による目的語前置と理解され、しかもノーマークである。問題は《水滸傳》の用例であるが、現代語規範文法にのっとれば“在”を用いるべきところであろう。

しかし、一方で場所・時間を補って考えてみれば如何であろうか？つまり、上記3例について、

我父親和四郎(在)這裡有麼？

兒子衣服(在)這裡有麼？

這樁事(以前)有麼？

と補えばさほど矛盾はないと考えられる。つまり、時と所を切り取り制限する事で「その時」「その場所」での有無を言うと考えれば、“有”は特別な存在動詞ではなく他の動詞と同じ理解がなされる事になる。ただ、このようなfuzzyな理解は、所謂規範とは相反する運命にあるため、とりわけ硬い中国語を反映する「朴通事」と俗な表現を多用する「老乞大」では、其の許容度において差が出たものと判断されるのである。

よって「老乞大」諸資料では“有”“在”を混同していたというより寧ろ現代語規範文法で認識される特殊な位置づけを“有”字文に厳密に認めていなかったというのが正確な見方だと思われる。さらに介詞の省略という口語要素が添加されて、所謂“一壁有者”構造文が多用されたと理解できる。

では、口語要素とは何を指すかを説明する必要があるだろう。まず、口語における介詞省略について現代語の用例を検討してみたい。いったい口頭語に於いては介詞はしばしば省略されるのであり、最近の教科書にはあまり見られなくなったが、以前の教科書なら必ず出てきた用例を

含め、次のような表現はいまでもごく普通の会話のシチュエーションの中で見られるものである。

- 1) 我是日本来的。 我是 (从) 日本来的。
- 2) 你哪儿去? 你 (到) 哪儿去?
- 3) 老爷爷, 您这儿坐。 老爷爷, 您 (在) 这儿坐。
- 4) 钥匙落家了。 (我) (把) 钥匙落 (在) 家 (里) 了。  
/ 钥匙 (, 我) 落 (在) 家 (里) 了。(主題化)
- 5) 牛奶买来了。 (我) (把) 牛奶买来了。/ 牛奶 (, 我) 买来了。(主題化)

上述の例の中には、あまりに俗であると反論を頂戴する例も含むかもしれないが、しかし、発話の場によって、自然に観察される表現であろう。

現代語におけるこのような自然言語の傾向は、歴代変わらず認められ、本資料における10%の現代語規範文法に合わない用例は、まさに意図せずしてこの口語を反映した結果だと考えられるのである。

#### 4. 結 論

言うまでもない事であるが、言語は其の使用される社会を反映するのである。社会の在り方を考慮しない言語研究はあり得ないと言ってもよかろう。陸続きで恒常的に中国と接触、交流せざるを得なかった朝鮮半島の歴史の中では、生きた共通言語を習得する必要性が常にあったという事を忘れてはならない。このような状況の中で、口語・俗語に対する取り組みは驚くべきものがあつたと考えるのが自然であろう。無論所謂二次資料とされる所以の母語干渉が皆無であつたと主張するものではないが、現代の研究者の一部が朝鮮資料において非文とする文例の存在理由をすべてここ母語干渉に帰する姿勢には大きな疑問を感じる。

たとえば、先にあげた“落家了”“牛奶买来了”の例のように、およそ正式文書・公的講演、演説などでは使用しない多々の会話表現が、現在日本において使用される中国語テキストの中に一部取り上げられている状況を考え合わせれば良く理解できよう。これらの例は、中国語をよく理解しない周辺地域で編纂されたテキストであるが故の誤用ではなく、むしろ逆に、中国語を熟知熟練し、非常に口語的な表現が取りこまれているため、かえって解釈しづらい状況となっているのである。そして、このような口語的な表現に出くわすと教員はしばしば説明に窮するのであるが、しかし、説明に窮しても日常でごく普通に話される自然言語であり、にわかには語法的解釈ができないからといって無視するわけにはいかないであろう。日常の語彙、語法は、その程度に於いて「破格」「誤用」とみなされる事も間々あるが、大抵は使用頻度が高いにもかかわらず辞書には載らない、また、正式文書には使用されないものである。

本稿では、このような観点から、主として李氏朝鮮期に使用された中国語テキスト『老乞大』において中国語の基本構文“有”字文を分析し、目的語前置と介詞の省略という2項目と関連付けて、従来母語干渉による誤用ないし蒙古語の影響を受けた特殊な用法とされてきたいくつかの事例について検討を加えた。その結果90パーセントが現代中国語と同様の用法であり、残りの10%に関しても従来主張されるような誤用や特殊用法ではなく、寧ろ自然言語をそのまま映した非常に口語的な表現である可能性を指摘した。朝鮮資料は中国語口語史研究の最も重要な位置づけにおくことが出来る資料であると言えよう。

#### (付記)

本稿は科研基盤研究（B）「中国語の構文及び文法範疇形成の歴史の変容と汎時的普遍性——中国語歴史文法の再構築」（代表 木村英樹）の成果の一つであり、研究例会では代表木村先生はじめ、メンバーの皆様から多大なアドバイス・ご示教を頂戴しました。ここに記して御礼申し上げます。

#### 【注】

- 1) 時に規範文法から外れるという意味において破格的と捉えられるかもしれない。また、修辞上の効果を狙うための前置という事も考えられ、必ずしも口語的であるとは言えないという見方もあるが、会話のテキストであるという本資料の性質上、修辞上の効果とは考えにくいであろう。
- 2) 資料の詳細に関しては平凡社2002を参照されたい。
- 3) 原刊本については『元代漢語本《老乞大》』（慶北大学出版部、韓国大邱、2000）、他3本については「奎章閣資料叢書 語學篇1, 2」（서울大學校奎章閣、2003）に収められる影印を使用した。
- 4) 木村英樹、“有”構文の諸相および「時空間存在文」の特性、2010年、未公表  
Cf. 木村英樹、現代中国語における存在表現の諸相と「時空間存在文」の特性、日本中国語学会第59回全国大会予稿集 シンポジウム招待講演、2009.10.23、北海道大学
- 5) 本稿では動詞の“有”について検討するので、当然のことながら語気助詞を除外し、多くの付随する別の問題を有するため否定形式も除外して考察する。尚、分類は木村2010に依るものの本稿の分類結果に関しては、玄の判断であり、不適切な分類をしている場合はその責はすべて玄にある。
- 6) 資料により葉数が異なるため、平凡社2002の分段に従って話数で出現個所を示す。
- 7) 次の2例である。（第十六話）舊：主人家，餅了也那不曾？ 待了也，恁放卓兒先喫，／飜：主人家，餅有了不曾？ 將次有了，你放卓兒先喫，／新：主人家，餠餠有了麼不曾？ 立刻就有了，你放上卓子先吃，／重：主人家，餠餠有了不曾？ 立刻有了，你放卓子先喫，  
（第四十四話）舊：月黒也，恐怕迷失走了，誤了路子。／飜：月黑了，恐怕迷失走了，誤了走路。／新：月黑了，恐怕有迷失，誤了明日走路。／重：月黑了，恐怕有迷失，誤了明日走路。
- 8) アルタイ語の影響を受け、語序がSOVとなった言語をここでは意味する。
- 9) 玄2007で検討した梁1998などがこの立場をとる。
- 10) 副詞“都”などの強調マークを伴わないということをごここでは意味する。
- 11) 佐藤1994のように、このような“有”が元曲に見られる事を指摘し、〈有〉と〈在〉の区別をしない言語の影響とする金1988などの従来の説に対して、〈有〉と〈在〉の混同ではなく、〈有〉の実義に「自分をモノ扱いすることで、へりくだっていることをあらわしている」（p.41）ことを認める

新たな見解を提示しているものもある。

12) p.5

13) 「介詞の使用が顕著に増加している。」(p.9)と指摘している。

14) p.5 書き換え例として、次の用例などを挙げた。

(17) 編修相公有麼? / 小廝道: 我相公不在家。【朴諺】

你相公在家麼? / 我相公不在家。【新釈】

(18) 高麗來的秀才有麼? / 書房裏坐的看文書裏。【朴諺】

高麗來的秀才還在此住麼? / 在書房裡看書哩【新釈】

#### 【引用文献】

(書籍)

平凡社 2002 『老乞大 朝鮮中期の中国語会話読本——』佐藤晴彦・金文京・玄幸子, 平凡社東洋文庫 699

梁 1998 梁伍鎮《老乞大朴通事研究》太學社 (ソウル)

呂叔湘 1982 《中国文法要略》汉语语法丛书 (商务印书馆)

(論文)

玄 2007 玄幸子 李氏朝鮮期中国語会話テキスト『朴通事』に見られる存在文について. 関西大学 外国語教育研究 (第 14 号), pp.1-12.

佐藤 1994 佐藤晴彦〈一壁有者〉考, 『神戸外大論叢』45-7

金 1988 金文京, 漢字文化圏の訓読現象、『和漢比較文学叢書 8 和漢比較研究の諸問題』(汲古書院)